

# 学会ニュース

## 目次

|                            |         |
|----------------------------|---------|
| ・ 本年度学会費収入の状況と会費納入のお願い     | .....1  |
| ・ 第31回大会について               | ..... 2 |
| ・ 国際18世紀学会執行委員会報告          | ..... 2 |
| ・ 『年報』投稿論文の完全公募化について       | .....3  |
| ・ 十八世紀のフランス演劇における異性装 中山 智子 | .....4  |
| ・ ドイツ冬便り 小田部 胤久            | .....8  |
| ・ 事務局より                    | .....11 |

## 本年度学会費収入の状況と会費納入のお願い

ここ数年、18世紀学会会費の納入率が著しく落ち込んで来ております。現在は、418名の会員の方がおられます。それに対して、新しい年度順に会費収入を並べると、2007年度1,880,000円、2006年度2,075,000円、2005年度1,547,000円、2004年度2,485,000円（この年度は会費未納の方に数年分の未納分を払っていただきましたのでたまたま収入が増えています）、2003年度2,020,000円、2002年度2,610,000円となります。

本年度は、12月8日の時点で、会員数418名のうち、243名の方々だけが今年度分を納入済みです。未納の方が175名おられます。現在のところ、243かけ5000円で121万5千円しかまだ会費収入がない状態です。ちなみに、かなり会費納入が悪かった昨年でさえ最終的には188万円でした。

学会の事務局運営も可能な限りスリム化を心掛けて参りました。しかし、このままでは、大会開催、年報発行、諸外国の18世紀関係の学会との積極的な交流など、学会の円滑な運営に支障をきたすことが考えられます。学会事務局といたしましては、会員の皆様に学会費に相応するだけの学会運営を今後も続けてゆくのが最重要であることは、常に肝に銘じていることです。その上で、会員の皆様にもどうか会費納入のこの憂慮すべき状況についてご理解いただきたく存じます。

まだ会費を納められていない方は、うっかりお忘れの方が殆どであると思います。未納の方には、今回の学会ニュースの発送にあわせて会費納入のための振り込み用紙と、改めての会費納入のお願いを同封させていただきました。上記の現状をご理解の上、何卒どうかよろしく会費納入をお願いいたします。

### 第31回大会について（および自由論題公募について）

本年度の大会は、2008年6月20日（土）、21日（日）に、多摩美術大学の八王子キャンパス（東京都八王子市<sup>わりみず</sup>鎌水2-1723）で開かれることが決定いたしました。開催校責任者は、小穴晶子会員です。詳細は5月半ばにお届けする予定の大会プログラムでご案内申し上げます。今回の大会では下記の共通論題を予定しております。また自由論題も下記の要領で公募しております。韓国学会との交流として韓国から、そして共通論題の発表者の一人として中国から、それぞれ一人の研究者お招きすることを企画中です。どうかふるってご参加下さい。

共通論題：「帝国」（コーディネーターおよび司会は長尾伸一会員、原則として6月21日を当てる予定です）。

自由論題公募：（原則として6月20日を当てる予定です）

第31回大会で発表を希望される方は、1000字以内の発表要旨（なるべくテキストファイル形式あるいは「ワード」ないし「一太郎」形式のフロッピーディスクとハードコピーの両方）を付けて、3月17日（火）までに学会事務局までお申し込みください（メールでも結構です）。発表者の待ち時間は1時間、うち報告が40分、質疑が20分を予定しておりますが、申込者が多数の場合には、待ち時間を短縮したり、あるいはこれまでの発表の有無、共通論題を含む諸分野間のバランスなどを勘案して、常任幹事会で調整ないし選考させていただきますので、その点、あらかじめご了承下さいますようお願い申し上げます。また、会場で配布されるコピー資料は原則としてご自分でご用意いただくことになっております。詳細はプログラムが決定次第、事務局から個々に連絡申し上げます。

### 国際執行委員会よりのお知らせ

2008年8月28日（木）に国際18世紀学会執行委員会がダブリンで開かれました。日本からは、国際18世紀学会執行委員の寺田元一会員、および日本18世紀学会国際幹事の増田真会員が参加しました。議事録（要旨）は日本18世紀学会HPをご覧ください。以下ではとりわけ日本の会員の方々に重要な事柄をお伝えいたします。

1) 2008年9月にチェコ共和国で「友情、懇親、もてなし」をテーマとする2008年の若手セミナーが開催されます。16人が参加の予定ですが、日本ならびに東アジアからの参加者はありません。

2) 次回のグラーツ大会は2011年7月25日～29日開催される予定です。テーマはなお未定ですが、「未来の展望と期待」ないし「啓蒙時代の中東欧」などの案が出されています。なお、大会の第3の公用語としてドイツ語が認められました。

3) 若手セミナーの予定

2009年のセミナーは、9月21日から25日にかけてリスボン（ポルトガル）において開催されます（テーマは「ヨーロッパと植民世界」）。詳細は学会ホームページの最新情報欄の「国際18世紀学会 「若手セミナー」」をご参照ください。応募締め切りは2009年2月25日です。2010年はアイルランド学会がベルファストで開催（テーマは「文化媒介者」）する予定です。また、2011年はグラーツで大会に合わせて開催されます。

### 『年報』 投稿論文の完全公募化について

先の幹事会で、『年報』への論文投稿をほぼ完全に公募化することが承認されました。完全公募化の方向で進めることは、既に投稿論文の制度を始めた当初より了解されていたことです。具体的には、投稿規程の最初の条項の冒頭を例えば次のように変更する予定です。

「論文の投稿資格は、日本18世紀学会会員が有する。ただし掲載に際しては、同学会大会における自由論題に関わる論文を優先する。」

その他、細かい条項・文言を整理し、次回の大会総会で投稿規定の改訂を審議する予定です。

## 十八世紀のフランス演劇における異性装

中山 智子（京都外国語大学）

文芸における異性装は、古代からひとつのトポスをなしているが、とりわけ十七、十八世紀のフランス演劇には女性登場人物が男装する芝居が数多く見られる。十八世紀の劇作家たちは何を意図して女性たちの異性装を芝居に取り込んだのだろうか。異性装についての研究の現状を確認した上で、十八世紀のフランス演劇における異性装の例について考察してみたい。

十七、十八世紀ヨーロッパでは、女性による男装が数多く指摘されている。社会の様々な階層に存在した男装の女性たちについての実証的な研究の嚆矢となったのは、おそらくデッカー、ファン・ドゥ・ポル『兵士になった女性たち—近世ヨーロッパにおける異性装の伝統』（原著1989、邦訳2007）だろう。主として十七、十八世紀のオランダ共和国での事例を社会的に論じたこの研究書は、続く研究に大きな刺激を与えた。しかし、北米、イギリス、オランダ、ドイツで異性装の研究が進むのに対して、フランスでの研究は遅れをとっていた。1999年、女性史の研究誌『クリオ』が男装の女性たちについての特集号を組み、フランスでの本格的な研究の先駆けとなった。続いて、スタインベルグが十六世紀から十八世紀にかけてのフランスでの異性装を歴史的資料から研究した著書『性の混乱』（2001）を発表し、アンシャン・レジーム期のフランスにおける異性装の実態についての一つの見取り図が示された。

異性装についての学際的研究の一つの到達点を示しているのが『女性による異性装と自由』（ルデュック編、2006）だろう。2005年、リール第三大学で行われた異性装についての学会での研究発表を元にしたこの論文集は、十四世紀から二十世紀までヨーロッパにおける女性による異性装を論じた二十七本の論文を収録する。文学、歴史、思想史、美術史、音楽学、フェミニズム、クイア理論など多彩な分野の研究者が参照した資料は小説、演劇、オペラ、定期公刊物、手紙、自伝、絵画など多岐にわたり、異性装が提起する問題の多様性を示している。

さて、十八世紀のフランス演劇においては、異性装はどのように扱われているだろうか。フランスでは、十七世紀始めにようやく女優がパリの舞台に立つことが許され、1630年代から、本格的に女優が舞台に登場するようになる。それと同時に、ヒロインが男装する芝居が盛んに作られるようになった。一方で、男性登場人物が女装する芝居も少なからず存在する。しかし、女性による男装との大きな違いは、男性の女装の場合は、ほとんどの場合、従僕など道化的役回りの人物による変装であり、コミックな効果を狙ったものであることだ。対して、女性登場人物による男装は、それ自体がドラマの重要な仕掛けになることが少なくない。

女性登場人物が男装する芝居は十七世紀に盛んに作られ、十八世紀中頃までその流行の名残が見られる。フランス革命期に再び流行を見るまで、十八世紀後半にはその数が急激に減ってしまう。

十七世紀の芝居には、男性の衣装を身につけることで、女性が劇的に変身してしまうものが多い。兵士の衣装は箱入り娘を荒くれ者に、騎士の衣装は侍女をいっばしの色男に変える。男の衣装は女たちに、すぐさま様々な能力を与えるものとして描かれている。「衣装がそのまま実体なのである。(中略)服装が女性をつくり、服装が男性をつくる—衣装こそが本質である」(オーゲル『性を装う』1996、岩崎・橋本訳1999)と、エリザベス朝演劇における異性装についてオーゲルは端的に表現したが、この指摘通り、まさに「衣装が性を作る」のだ。

一方で非常に興味深いのは、十八世紀のフランスの劇作家たちの中に、「衣装が性を作る」マジックが、文学的仕掛けとしてすでに使い古された手段であることに自覚的である者が出て来ることだ。例えば、サン＝ジョリーは男装して森の中を逃走するヒロインに、「剣を持って扇を持った時と同じで勇気が出ない」と言わせている(*Le Philosophe trompé par la nature*, 1719)。この戯曲で劇作家は、ヒロインの男装姿を見たアルルカンに「シルヴィアさんはパニエより半ズボンをはいた方がずっときれいだなあ」と言わせており、男装は、むしろヒロインの美しさを引き立てる衣装となっている。

また、ピロンは逃げた恋人を探すためヒロインが侍女と共に騎士の姿で旅に出るという古典的な設定を用いながら、男の衣装も効力がなく気の小さいヒロインに対して「衣装が性を作る訳ではないんですよ」と諭す侍女を登場させている(*Tirésias*, 1722)。この戯曲では、その後も、ヒロインが感情の高ぶりを押さえきれず気絶し、気付け薬をかがされるなど、伝統的な男装のヒロイン像を反転するような仕掛けが用意されている。

しかし、「衣装は性を作らない」と劇作家たちが次第に認識するようになって、ヒロインの男装は観客にとって大きな魅力であったことは変わりなかった。男装のヒロインを描いた芝居について、ダルジャンソン侯は劇評で「美しい女優の男装は常に観客に好まれる」と何度か記している。マリヴォーの芝居(*La Réunion des Amours*, 1731)で男装し恋の神を演じた女優については「芝居はその価値に見合うほど成功しなかったが、半ズボン姿のダンジュヴィル嬢は芝居を引き立てた」と書いてさえいる。

女優にとっても、男装のヒロインを演じることが一種のステイタスであったようだ。1684年にコメディ＝フランセーズが上演したカンピストロンの芝居(*L'Amante amant*)はヒロインが騎士に変装する筋立てを持つ。この戯曲の構想の背景には、当時モンフルーリの戯曲(*La Femme juge et partie*, 1669)が再演される際、男装のヒロイン役を割り当てられなかった女優が不満を抱いたため、カンピストロンが彼女のために戯曲を書いたというエピソードが伝えられている。この戯曲には、侍女がヒロインの男装の魅力を褒め称える不必要に長い場面があり、劇作家が主演女優を男装させることで華を持たせようとしたことをうかがわせる。

また、1716年にパリに復帰したイタリア人劇団も、公演を再開したその年に少なくとも4本、男装が主題となるような芝居を上演している。その後も劇団は、マリヴォーやドゥリール・ド・ラ・ドルヴティエールらの男装のヒロインを描いた芝居を上演し続けた。当時この劇団には、フラミアとシルヴィアという二人の看板女優がいたが、上演記録からは、二人が競い合いように男装のヒロインを演じていたことが分かる。

歴史の中の一事例でもなく、文学的ファンタジーの中の存在だけでもない、生身の女性である女優の男装が舞台上で放った魅力を今日どのように測ればいだろうか。それには、服飾史研究の知見が大きなヒントとなるだろう。

フォレストィエは、1680年までのフランス演劇における女性登場人物の男装の事例を分析し、騎士への扮装に比べて、足を隠す衣装を身につける隠者への変装が極端に少ないことを指摘している。その理由として、男性が大半を占めた当時の観客が、騎士の衣裳を身につけ脚の形を露わにした女優に少なからず興味を抱いたであろうことを挙げている（フォレストィエ『フランス演劇(1550-1680)におけるアイデンティティの美学』、1988）。

男装した女優の脚が観客のエロティックな想像をかき立てたことは、パンツ・スタイルが長い間男性の専有物であった服飾史の事実が裏打ちする。セクシュアリティの表現としての衣服の歴史を、男性服と女性服を比較対照しながら検証したホルンダーは、女性のパンツの着用について次のように述べている。

「ドレスの幸福な時代が何千年と続いてきたなかで、堅気の女性の脚を一枚の布で二つに分けるなどということは、性的な冒瀆にほかならなかつたのである。十八世紀以来、ソフトコアのポルノグラフィにパンツ・ルックの女が登場するのはそのためである。さらに、上流社会の身持ちの悪い女が男を誘惑しようとするときにはパンツ・スタイルが選ばれてきた、という十六世紀以来の伝統もある。」（ホルンダー『性とスーツ』、1994、中野香織訳、1999）

一方で男性は、十四世紀以来、フランス革命時の「サン・キュロット」に由来する長ズボンの定着にいたるまでの間、膝丈の半ズボン、ストッキング、ヒールつきの靴で脚線美を強調していた。

すでに言及したカンピストロン戯曲には、男装した女主人の脚が美しいかどうか侍女が確認する場面がある。「何よりも脚が重要」「脚が不恰好ならスタイルもだいなし」と強調する侍女の台詞は、脚の美しさがこの時代の男性のエレガンスの一部であったことを念頭におけば両義的にも響く。この言葉は、男性の観客が女性（女優）の脚に対して抱く欲望を代弁するものだろうか？それとも、男性の脚線美をセックス・アピールととらえる女性の視線を代表するものだろうか？

異性装が舞台上で持った効果について考察を積み重ねるうちに、例えば、ボーマルシェの『フィガロの結婚』（1778、パリ初演1784）に登場する美少年シェリュバンによる女装が発揮した効果もより明確になるかも知れない。この役は、周知のとおり若い女優が演じる

こととなっている。シェリユバン役の女優は舞台上に登場した時点で、すでに「男装」していることになるが、その上で、作品中二度、シェリユバンが女装する場面がある。

なかでも第二幕、伯爵夫人の寝室で侍女シュザンヌに女の衣装を身につけられようとする場面は、シェリユバンの両性具有性を表す場面として有名である。しかし、小姓のマントを脱がされ、伯爵夫人の帽子をかぶらされた女優の姿にいま少し目を留めてみたい。上演のレベルにおいては、マントを取り、腰や脚の形を露わにし、女の帽子をかぶった姿は、両性具有というよりむしろ、それを演じる女優の性的魅力を強調したのかもしれない（第二幕では伯爵の登場によってシェリユバンの女装は途中で終わり、シュザンヌの衣装を着せられるにはいたらない）。

ボーマルシェがわざわざここで「縁なし帽」(bonnet)を選んだのも理由がないことではないだろう。女性特有の装身具であった「頭をすっぽり包み込むボンネット」は「慎み深さの表現」とみなされ、それに対して「もともと男性か、あるいは下層階級の装身具に起源を持つ」縁つき帽ハットは「常にインフォーマルで、きわどく、いささか下品」(ホルンダー)なものであったからだ。劇作家は小姓を演じる女優に、非常に女性的な装身具である縁なし帽をかぶらせることで、男装の魅力の新鮮さを増すことを狙ったのかもしれない。

「異性の服を着用すれば、セクシュアリティそのものに焦点が当たるからである。異性の服を着たとたんに、隠されていたその人のセクシュアリティが表に現われるような場合は、ことにそうである。衣服倒錯は、性的快楽なのである。」(ホルンダー)という言葉は、異性装が文学的トポスとしての効力を失いはじめた十八世紀の演劇における男装の魅力を何より言い表しているのではないだろうか。

ドイツ 冬便り  
小田部 胤久（東京大学）

2008年10月よりドイツに滞在する機会に恵まれた。ドイツで冬を迎えるのも今回で4度目となる（おそらく最後かもしれない）。今まで紅葉がきれいだと思ったことは1度もなかった、いや、紅葉に気づいたこともなかったが、この10月のハンブルクは天候もよく、アルスター湖畔の散策を楽しんだ。とりわけ黄葉した樅の木や紅葉した蔦の葉の美しさには心を打たれた。しかし11月になると北ドイツ特有の曇天の毎日、木の葉もほとんど落ちる。木村・相良の独和辞典の背表紙に樅の葉の文様が彫り込まれているため、私はいつしか樅の葉を「木村・相良」と呼ぶようになったのだが、ドイツに紅葉はない、などと私が今まで信じ込んでいたのは、茶色に枯れた「木村・相良」が雨に濡れて道路につもっている風景が目には焼き付いていたからなのであろう。11月21日には初雪、すっかり冬景色になった。

この3ヶ月をふりかえって見ると、ドイツ18世紀学会の大会「18世紀におけるドイツとトルコ」（10月9-11日、ボン）はドイツに来てまだ日が浅かったため出席できなかったが、その後ドイツでいくつかの会議に顔を出した。いずれも18世紀を直接主題とするものではないが、18世紀研究に関係する面もあるので、以下感想を記すことにしたい。

最初に参加したのは10月16-17日の Internationale Ernst-Cassirer-Gesellschaft のシンポジウム。これは Warburg-Haus で開催されたが、この建物はかつてヴァールブルクが住んでいて私設図書館として用いていた家を近年ハンブルク大学が買い取って大学の施設として公開したもので、実は私自身も今まで入ったことがなかった。図書室の天井のランプや書架の曲線がすばらしい。

ドイツではこの10数年ほどカッシーラー・ルネサンスともいうべき現象が認められる。日本ではカッシーラーがほぼ恒常的に読み継がれてきたのとは対照的に、ドイツにおいてカッシーラーは（亡命を余儀なくされたという事情も重なり）ハイデガーの影に隠れてきた。だが、1996年に Essay on Man（邦訳名は『人間——シンボルを操るもの』）の独訳が（遅きに失したとはいえ）PhB 版で出版されて、状況に変化が生じた。この動きをさらに加速させたのが批判版全集の公刊。国際エルンスト・カッシーラー協会の会長ビルギット・レッキ（ハンブルク大学）はこの全集版の総責任者でもある。もちろん、会議参加者は（私のようなものも含めて）15名程度であるから、研究者の層もそれほど厚いとはいえないであろうが、書簡集の編纂をとおしてカッシーラーの人間関係を再構成したジョーン・クロイス（ベルリン・フンボルト大学）、およびカッシーラーとプレスナーの関係を再考したクリスティアン・メッケル（ベルリン・フンボルト大学）の発表は、カッシーラーに新たな光を当てるものであった。哲学者の中でカッシーラーほどにヘルダー、ゲーテ、フンボルトに、あるいはケンブリッジ・プラトン主義に注目した人はいない、といってよいであろう。通常の哲学史記述をいわば逆転させるような力をカッシーラーの著作は秘めている。カッシーラーの再評価は、当然のことながら、18世紀研究にも大きな影響を及ぼすはずで



あるが、日本ではすでにカッシーラーの啓蒙主義理解に関して中野好之元会員、鷺見洋一会員らによる詳細な先行研究があり、これは日本の研究者の先見の明を証すものといえよう。

10月30日には後期シェリングに関する会議（フランクフルト）に参加したが、これは18世紀研究とはほとんどかかわりがないので割愛し、次に10月31日から11月2日にヒルデスハイム大学で開かれた会議「文化哲学」に触れることにしたい。主催者の一人ティルマン・ボルシェ（ヒルデスハイム大学）はその基調講演においてカッシーラーを明示的に踏まえつつ、「文化哲学こそ現代における第一哲学である」という命題を提起し、かつこの文化哲学を interkulturell なものとして捉えたが、ここにもカッシーラー・ルネサンスの確実な影響が読み取れる（ちなみにボルシェにはヘルダーに関する編著もある）。18世紀に直接かかわる発表としては、クラウス＝アルトゥール・シャイアー（ブラウンシュヴァイク大学）の「ルソーの『無限判断』——文化哲学の由来としての文化批判」に触れておきたい。シャイアーは、ルソーの第二論文に見られる文化批判を「無限判断」（すなわち、コブラの解体）と捉え、それが『告白』（第七巻）において頂点を迎えた、と解釈しつつ、そこに見られる文化批判を現代に継承する必要性を訴えた。ただし、シャイアーによれば、自然主義者ルソーのうちには「人間が自己自身を生産する」という発想が欠けており、それゆえに、ルソーによる文化批判を生産的思考と結びつける必要がある。シャイアーの捉え方に異論はありうるが、神によって支えられてきたコブラが解体する過程として近代を批判的に特徴づける視点は示唆的であろう。

なお、この会議には interkulturelle Philosophie の提唱者の一人フランツ・M・ヴィンマー（ヴィーン大学）も参加し報告を行った。従来のヨーロッパ中心主義を内側から批判し、多くの文化のうちに潜在的に認められる「哲学」（もちろんそれは従来哲学とみなされることのなかったものであるが）を聞き取ろうとする彼の態度は、おそらく、良心的西側知識人を代表するものであろう。彼には「間文化性」の立場から18世紀ヨーロッパの哲学史記述を再検討した研究書があるが、彼の仕事は寺田元一会員の「国際文化学」の構想と響き合う側面を多く持っており、今後の18世紀研究にとって一つの道標となりうると思われる。

最後に11月13日から16日にかけてハンブルクで開かれたブルーメンベルクに関する会議「理性—想像力—想起」に触れておこう。ブルーメンベルクといえばミュンスター大学とのかかわりが大きい。第9回国際18世紀学会が1995年にミュンスター大学で開催された折、あるセッションの司会者カルステン・ツェレ（当時はジーゲン大学、現在ボーフム大学）が、「この部屋でブルーメンベルクがいつも講義していました」と最初に触れたことを思い出す。ブルーメンベルクとハンブルクとの関係も忘れてはならない。彼は1945年から2年間ハンブルク大学で学び、また1958年から60年まで同大学哲学科の助教授を務めていたからである。

以下では、18世紀研究にかかわる限りにおいて今回の会議をふりかえることにするが、最も印象的であったのは、ブルーメンベルクの仕事を反ガーダマー的なものとして捉え、ブルーメンベルクの仕事のうちに19世紀的な Bildung に対する18世紀的な Gelehrsamkeit の復活を読み取るトーマス・マイアー（ライプツィヒ大学）の講演である。またビルギット・レッキ（ハンブルク大学）は「道具的理性の再評価のために」と題した講演において、ブルーメンベルクの Technik 概念を20世紀に主流となった「道具的理性」批判と対比させつつ、カントの『判断力批判』第76節の文化論の継承者としてブルーメンベルクを捉えるべきである、と論じた。最終日にはピニ・イフェルガン（テルアビブ大学）が「洞窟」にあえてとどまろうとする反プラトン主義者ブルーメンベルクについて、リュースディガー・ツィル（ポツダム大学）が生活世界にとどまることによって哲学上のスパートニク・ショックを克服したブルーメンベルクについて報告したが、これは啓蒙の精神の可能性と限界とを問うものといえよう。

ところで、暗くなると足は自ずと劇場に向かうが、18世紀にかかわる一つの試みとしてジョン・ノイマイヤーのバレエ《ヨゼフの伝説・宴の終わり》に触れておきたい。ともにリヒャルト・シュトラウスの音楽によるバレエであるが、クープランの編曲に基づく《宴の終わり》（2008年6月初演）は、ノイマイヤーによる18世紀へのオマージュともいえる作品である。バロック的なものないし18世紀的なものを20世紀前半に蘇らせようとしたシュトラウスの試みを、ノイマイヤーは自らの営みのうちにさらに反響させる。こうした作業がおそらくノイマイヤーのバレエに通底する一種の枠構造を作り出しているのであろう。また、バレエ《クリスマス・オラトリオ》（音楽はJ・S・バッハの同名の作品の第1部から第3部まで）における「ある男性」役——この役は後に「母の夫」（すなわちヨゼフ）役へと引き継がれる——もこの枠構造の構成に与っており、2000年前のキリストの誕生と現在とを媒介する。ちなみに、18世紀とは直接かかわらないが、ノイマイヤーの《人魚姫》（2007年7月ハンブルク初演）における「詩人」（アンデルセン⇔ノイマイヤー）もまた、作品にロマン的な枠構造を作り出している。

11月28日からはハンブルク美術館で《ハッケルト展》が始まった。ゲーテの伝記的作品「フィリップ・ハッケルト」（1811年）が名高いが、ホフマンの短編「G 町のジェズイット教会」（1816年）の登場人物としても記憶されている。この展覧会を見るのは（ノイマイヤーの《くるみ割り人形》《かもめ》と併せて）1月の楽しみである。

## 事務局より

### 選挙について

2009年度は幹事会改選の年にあたりますので、3月に幹事選挙を行います。学会ニュースと共に同封いたします所定の用紙にご記入の上、3月13日（金曜日）までに学会事務局までご郵送下さい。（消印有効）

### 名簿について

2009年は名簿作成の年度にあたります。学会ニュースに同封いたしましたカードのデータに間違いがないかどうか、ご確認のうえ、1月31日（金）までに事務局にご連絡をお願いいたします。なお、間違いがない場合にも、その旨を事務局にご連絡ください。

なお、事務局へのご連絡は

・ e-mail: jsecs@nifty.co.jp

・ fax: 03-5841-8958

・ 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部  
美学芸術学研究室

のいずれかをお願いいたします。

新名簿は4月末頃発送の予定です。

### 新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

### 新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

### メーリングリスト

日本18世紀学会では、学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします

幹事会メンバー(50音順): 安西信一(常任幹事・年報担当)、井田尚(常任幹事)、伊東貴之(常任幹事)、岩佐愛(常任幹事・年報・書評担当)、王寺賢太、小田部胤久(代表幹事)、笠原賢介(常任幹事、会計担当)、金沢美知子(常任幹事)、川島慶子、小穴晶子(常任幹事・年報・業績覧担当)、高橋博巳(東アジア交流担当)、寺田元一、長尾伸一、中山智子、馬場朗(常任幹事、庶務・学会ニュース担当)、堀田

誠三、増田真（国際幹事）

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

**日本18世紀学会ニュース 第59号 2009年1月発行**

発行者 日本18世紀学会 代表者 小田部 胤久

事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室

e-mail: [jsecs@nifty.com](mailto:jsecs@nifty.com)

fax: 03-5841-8958

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>